

今、子供達に、日本では何人ぐらい戦争のために死んだと思うかと聴いても全然わからない。まして日本の軍人の戦死以外の、満州にいた、日本人の地方社会人の支社の数と、日本人の資産の全部が喪失した損害など考えもつかないだろう。

二度と戦争を繰り返さないように、戦争の悲惨と如何に無駄であるかを後世に伝える責任を切に思うことしきりである。

拓友と妻の霊位にささぐ

山形県 佐藤 貞彦

昭和十六年四月拓務省の青少年義勇軍の教師、幹部として内原訓練所第十六中隊に奉職、日本国の生命線満州国の五族協和、北辺の鎮護、食糧増産の国策に感動して渡満しました。十六中隊の名称が太田中隊と改称された。十七年に結婚、十八年長男誕生。

昭和十九年五月宝清縣に太田中隊が第四次羽陽義勇隊

開拓団と改称され入植移行し、妻子を団に残して七月十日関東軍に応召、吉林省双河縣で終戦、ソ連兵に捕えられ、シベリヤで労役、二十一年四月釈放された。十日後ハルビンにたどり着き、日本人会で羽陽義勇隊開拓団は阿城に居ると知った。二百三十人の団員は根こそぎ召集、団員と花嫁約五十人と太田団長一人が閉団し避難していた。妻は子供を連れ避難中、団員と離れ、関東軍の将校斥候下に加わり、妻は子供を抱きながら小銃で交戦、負傷した。二十一年五月ハルビン日本人会を通じて妻子と再開、労をねぎらった。ほどなく愛生孤児園で長男栄養失調で死亡、遺髪をうけた。七月に妻は将校斥候に再度加わり銃で交戦し負傷が原因で戦死した。我々は二十一年七月阿城難民收容所に日本人会の案内で着く。団員は僅か十人と再会、同年九月十八日実家である山戸村に引揚げる。

拓友と妻子の霊を照霊するにはどうすれば良いか熟慮した結果、農業学校や農業指導で学んだ造林で、山林の公益機能たる大気の浄化、酸素の供給、水資源の涵養、国土の保全等の公益機能が昇天の霊界も世界各国がいと

良い国に基いで、軍力ではなく御神慮に従って造林と決意した。

妻の母と、私の母二人に戦いの話をするに泣きながら、貞彦も立派だ、南滿の吉林省より更に安全な所に大多數は逃げたのに、貞彦は、団員と家族を思い、北進し、ソ連兵に捕らえられ黒河からシベリヤで労役と少榮養でも体を鍛えていたので丈夫で帰国出来たのだと言ってくれました。私の生まれた三瀬の加藤重朗左エ門様よりよし杉苗作りをするには山五十川より三瀬にこい、苗畑に向く土地を与えるからと言われ、妻の妹と結婚し現在の住所に移住、杉切り山を冬も雪をのけのけ得意の開墾鋤で開墾したが、苦労話でなく、楽しみ話です。約二ヘクタールの苗畑を現在は長男夫婦で頑張り、私は山林経営で頑張っています。

哀しいことは太田団長と、団に残った団員多くが、太田団長とともに殉農報国したことを後日、阿城県から引揚げた方々から聴いて悲憤やるかたなく、ただただ拓友先輩同志の冥福を祈った。

開拓義勇軍の最後

北海道 沢田 貞

私は昭和十八年開拓団補充団員として、渡満しました。入植一年後、本部勤務となり農産加工の作業をすることになり、本部に残りました。

昭和二十年一月、家族招致で北海道へ帰り結婚、三月再び妻を連れて渡満しました。その頃は団員は入営や応召で、ほとんどおりませんでした。

八月には団幹部は全部応召、団員も、二十歳の者は私の外、男子三人、五十歳以上の男三人の七人、女子は、幹部婦人五人、団員妻三十五人ほどと団員の母四人ほど、小人、男女合わせて、四十六人、計九十七人ほどでした。敗戦後現地復員者、幹部二人、団員十三人、うち二人は復員途中戦死しました。

昭和二十年八月十三日、県公署で各団幹部集合、私も出席、作戦会議が行われたがソ連参戦は知らされなかつ